



## 酉の市

今日は「おとりさま」、つまり酉の市である。日本武尊（やまとたけるのみこと）を祀り、武運長久、開運、商売繁盛の神として信仰される鷲神社の祭礼で、11月の酉の日に行われる。今年の酉の日は、6日と今日20日の2回であるが、ひと月に3回ある年もあり、その年は火事が多いという俗説がある。ただし、酉の日が11月中に3回あるのはほぼ一年ごとなので、あまり信憑性がある感じはしないが…。

酉の市のつきものといえば熊手である。ちょっと長くなるが、Wikipediaの解説がおもしろいので引用してみよう。

\*

「酉の市」の立つ日には、おかめや招福の縁起物を飾った「縁起熊手」を売る露店が立ち並ぶ。また、市を開催する寺社からは小さな竹熊手に稲穂や札をつけた「熊手守り」が授与され、福を「掃き込む、かきこむ」との洒落にことよせ「かつこめ」と呼ばれている。

酉の市の縁起物は、江戸時代より熊手の他に「頭の芋（とうのいも）」（唐の芋）や栗でつくった「黄金餅（こがねもち）」があった。頭の芋は頭（かしら）になって出世する、芋は子芋を数多く付ける事から子宝に恵まれるとされ、黄金餅は金持ちになれるといわれた。しかし幕末頃から売られるようになった「切り山椒」が黄金餅に変わって市の縁起物となり現在にいたっている。本格的な寒さを迎えるこの時期、これを食べれば風邪を引かないといわれる。

縁起物の代表である熊手は、鷲が獲物をわしづかみすることになぞらえ、その爪を模したともいわれ、福德をかき集める、鷲づかむという意味が込められている。

熊手は熊手商と買った（勝った）、まけた（負けた）と気つ風の良いやり取りを楽しんで買うものとされ、商談が成立すると威勢よく手締めが打たれる（商品額をまけさせて、その差し引いた分を店側に「ご祝儀」として渡すことを「粋な買い方」とする人もおり、手締めはこの「ご祝儀」を店側が受け取った場合に行われる場合が多い。つまり、この方法でいくと結局は定額を支払っているわけだが、ご祝儀については明確に決まっているわけではなく、差し引き分以上の場合もあれば、小銭程度であつたりと買い手側の意思に依存している）。

\*

めでたい場での「粋な買い方」みたいなものが、現在ではなくなりつつあるようで寂しい。我が家では、毎年地元の大鳥神社に出かけて、昨年かった熊手を奉納し、新しい熊手を買っている。もちろん、商売繁盛用の大型のものではなく、「小さな竹熊手に稲穂や札をつけた「熊手守り」」であるが、毎年買っていると、どういうわけか買わないと気になるようになるもので、6日に行くのをすっかり忘れていたため、今日の学校帰りにお参りする予定である。私にとっては、いよいよ冬を迎える季節の風物詩といった感じであるが、さて、みんなの家ではどうだろうか？